セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.19

編集
発行　1989・3・25
代表者　佐賀県立九州陶磁文化館
　　牟田口　尚
　　〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100－1
　　電話 0955－43－3681
印刷所　三光印刷株式会社
　　佐賀県伊万里市新天町287－3

色絵弓浜皿（いろえゆみはまさら）　館蔵資料

佐賀・有田皿山
17世紀末～18世紀前半
口径29.5×19.5㎝　高さ4.7㎝
底径21.6×12.7㎝

一般に弓浜皿と呼ばれる、熨斗、破魔弓・矢、文箱などを組合せた文様を描いた皿である。破魔弓や矢は正月を祝って男児に贈る玩具で、一種の縁起物である。染付に赤・緑・黄・金の上絵付を施し、豪華で華やかな作行きとなっている。裏面は三方に染付で結熨斗文を配し、高台には線書きの櫛目文が描かれている。

特別企画展のお知らせ

「日本の青磁」展

佐賀県立九州陶磁文化館は、平成元年度の特別企画として「日本の青磁」展を開催します。会期は平成元年９月30日から11月５日まで、32日間の展観となります。使用する展示室は第１・第２・第３展示室です。

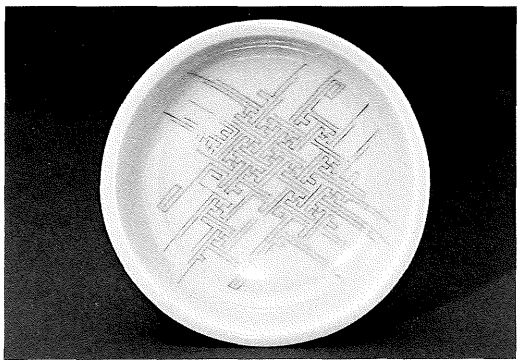
日本の青磁は、中国の青磁にならった平安時代の灰釉陶器をその始まりと考えることもできますが、これは磁器ではなく陶器であり、釉もまだ完全な青磁釉とはいえません。一般的には、鉄分による青緑色に発色した釉のある磁器を青磁といいます。よって日本における青磁の出現は、17世紀初頭の肥前においてということになります。

江戸時代に青磁が多く作られた窯場としては、有田皿山（佐賀県）、大川内（おおかわち）山の鍋島藩窯（同前）、波佐見（はさみ）（長崎県）、三田（さんだ）（兵庫県）、瑞芝（ずいし）（和歌山県）などが知られています。近代においては、幾多の陶芸家が青磁に挑戦し、それぞれの作風において独自の青磁を作り上げています。

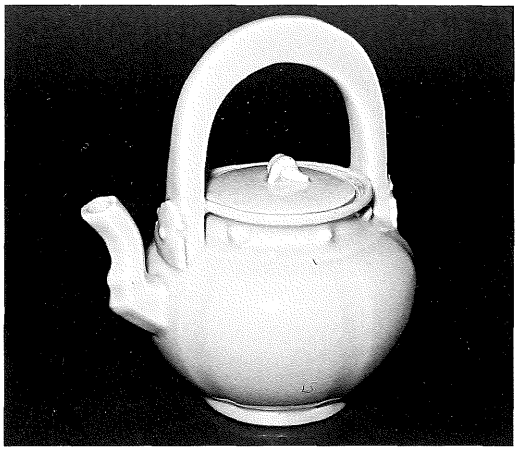
本展はこれらの日本の青磁を通観し、また中国青磁の影響なども示しながら、日本の青磁の特質を明らかにするものです。

○展示構成：

伊万里（有田）焼	20点	波佐見焼	20点
鍋島焼	35点	三田焼	30点
瑞芝焼	10点	瀬戸焼	５点
京焼	５点	近代・現代作品	40点
中国	５点	その他	25点
			計195点

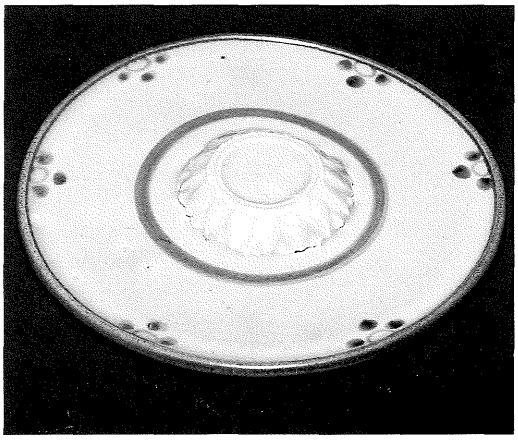


青磁色絵紗綾形文皿　鍋島藩窯
18世紀　館蔵



青磁瓜形水注　有田皿山
17世紀末～18世紀前半　館蔵

青磁染付菊花流水文三脚皿　有田皿山
17世紀後半　館蔵



青磁染付花散文盃台　波佐見・三股古窯
17世紀前半　個人蔵

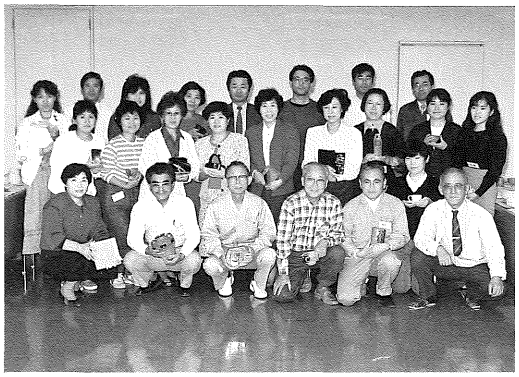
行事・展覧会スナップ

昭和63年度の行事や展覧会をスナップ写真でふりかえってみます。毎年定期的に開催されるものが、半数以上を占めますが、「金城次郎のわざ展」や「佐賀高取家コレクション展」、「松尾次郎展」、「一水会陶芸部公募展」、および当館の特別企画展「長崎の陶磁展」などは、それぞれに特色ある展観となりました。

陶芸教室　第13期・第14期

今年度の陶芸教室は、第13期が昭和63年６月４日から８月６日まで、第14期が９月３日から11月５日までの日程で終了しました。前期を大宅利秋先生、後期を中村隆敏先生に担当していただきました。県内在住の方々を対象としていますが、唐津市や三養基郡などの遠方からも応募があり、陶芸教室の人気がうかがえました。

第13期の閉講式記念撮影



第14期の閉講式記念撮影

学芸員実習

昭和63年度の学芸員実習は、７月25日から８月６日まで２週間行なわれました。受講生は７人で、梅光女学院の徳永仙子さんと久原三和さん、昭和女子大学の知北万里さん、西南学院大学の尾崎芳俊さんと菊池千枝さん、立正大学の一瀬ますみさん、佐賀県立有田窯業大学校の森田秀幸さんが修了されました。例年は２，３名ですが、今年が最も多い年でした。

閉講式記念撮影

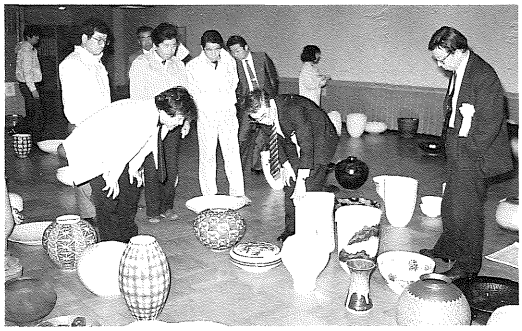
青少年科学活動促進事業　焼物教室

昭和63年度の佐賀県青少年科学活動促進事業の焼物コースは、昭和63年12月17日から平成元年１月15日までの土曜日または日曜日に、当館の施設を利用して行なわれました。８回の講座で焼物の種類や科学的な知識や実技について、体験的な学習がなされました。受講生は、波多小学校の田中美由紀さんや有田中部小学校の久家郁子さんなど、小学校３年生から中学校１年生まで12人が参加しました。茶碗や花瓶などをそれぞれ個性豊かに制作することができました。

受講生の子供たち

第85回九州山口陶磁展

第85回九州山口陶磁展の第１部美術工芸品・オブジェの部は、当館の第１展示室および第２展示室において、昭和63年４月29日から５月15日まで開催されました。山口県および九州各県から178名237点の出品があり、108点が入選しました。



審　査　風　景

佐賀 高取家コレクション展

昭和63年５月24日から６月５日まで、第１展示室において、高取綾氏から寄贈された茶道具関係資料131件の展覧会が開催されました。これらの寄贈品は、当館の茶室「碟泉庵（せっせんあん）」で活用されることになります。

唐銅欄干風炉と芦屋小霰真形釜

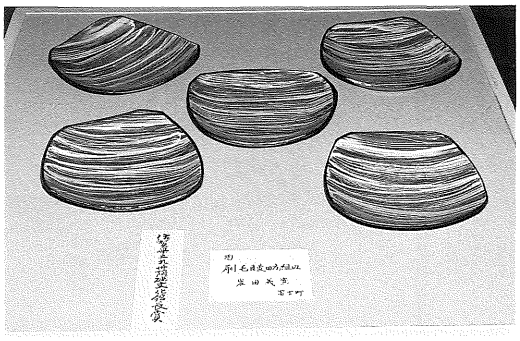
金城次郎のわざ展

昭和63年６月10日から７月３日まで、第１展示室および第２展示室において、沖縄の陶芸家であり、国の重要無形文化財保持者である金城次郎氏の作品展が開催されました。

終戦から壷屋時代の作品

第６回新工芸西九州工芸展

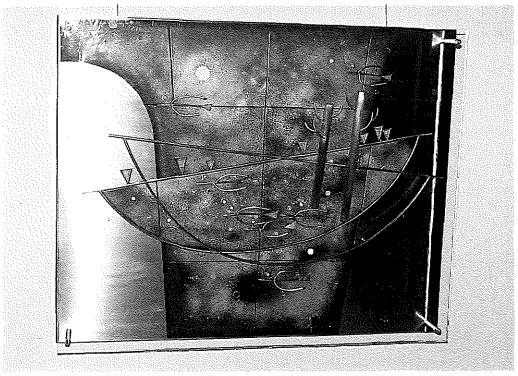
昭和63年７月６日から７月17日まで、第１展示室および第２展示室において、第６回新工芸西九州工芸展が開催されました。



岩田義實氏の作品（九州陶磁文化館長賞）

第７回現代工芸美術九州会展

昭和63年７月26日から８月７日まで、第１展示室および第２展示室において、第７回現代工芸美術九州会展が開催されました。



佐々木真澄氏の作品（現代工芸美術家協会会長賞）

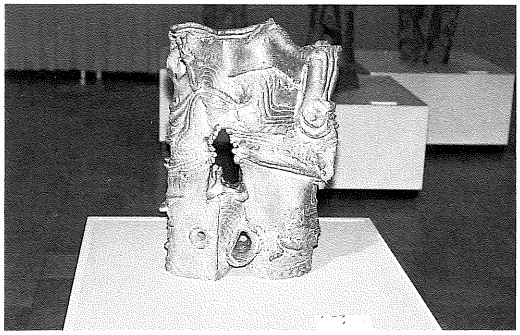
第25回陶磁器試験研究機関作品展

昭和63年８月16日から８月21日まで、全国の陶磁器産地にある研究機関による作品展が、第１展示室において開かれました。「くらしとやきもの」を統一的なテーマとし、食卓用品やインテリア用品など、96件が出品されました。

佐賀県窯業試験場の作品

松　尾　次　郎　展

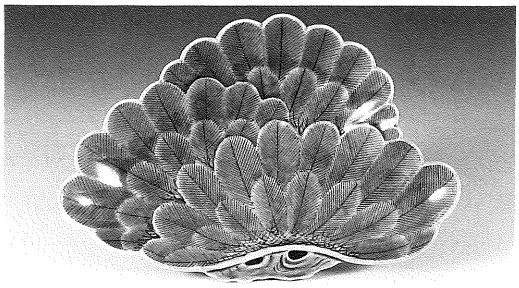
昭和63年８月25日から９月４日まで、第１展示室において松尾次郎展が開催されました。松尾氏は佐賀県鳥栖市在住の陶芸家です。「ハニワとウツワ」というテーマでしたが、ハニワを１点寄贈していただきました。



寄贈された「ハニワ１」

新　収　蔵　品　展

昭和63年９月６日から９月18日まで、第１展示室において、新収蔵品展が開催されました。昭和62年度に当館で購入および寄贈をうけた資料48件が展示されました。この館報の表紙の皿も新収蔵品展出品物です。



染付三階松文皿　鍋島藩窯

一水会陶芸部公募展　九州展

昭和63年10月８日から10月16日まで、第１展示室において、一水会陶芸部公募展九州展が開催されました。同展は第50回目ですが、当館では初めてです。

展　示　風　景

特別企画展「長崎の陶磁」展

当館の昭和63年度特別企画展として、10月22日から11月27日まで、第１・第２・第３展示室において長崎の陶磁展が開催されました。33日間で12,786人の入館者があり、好評のうちに無事終了することができました。

開会式のテープカット

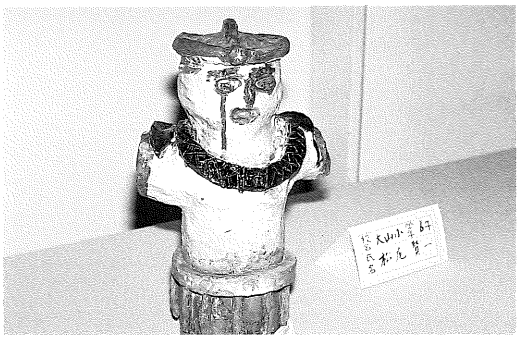
第20回有エデザイン科 卒業制作展

平成元年１月21日から１月29日まで、第１展示室において、第20回県立有田工業高等学校デザイン科卒業制作展が開かれました。今年で20回目ですが、当館では今回が２回目になります。陶磁器作品のほか、グラフィックや紙による立体作品などが展示されました。

展　示　風　景

第７回西松浦郡小中学校 学童美術展

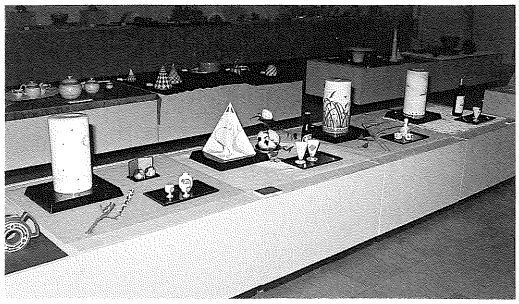
平成元年２月４日から２月19日まで、第７回西松浦郡小中学校　学童美術展が開かれました。陶芸作品の他、木や紙などを使った様々な作品も展示され、見る人を楽しませてくれました。



大山小学校６年松尾賢一くんの作品

第１回伊万里陶青会創作展

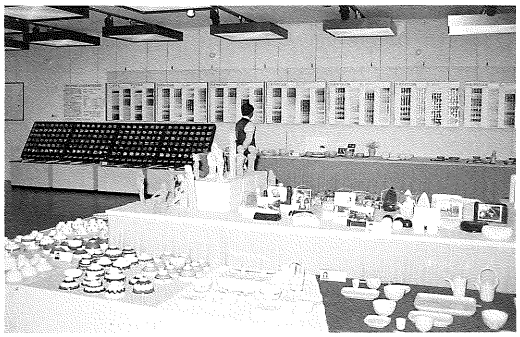
伊万里市の若手窯元の研究会である陶青会は、平成元年２月21日から26日まで、「○△□展」を開催しました。造形の基本にもどり、大川内焼の伝統を生かしながら各種の作品が出品されました。



畑萬陶苑の照明器具

第３回有田窯業大学校 卒業制作展

平成元年３月７日から３月12日まで、第３回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が、第１展示室および展示ホールで開催されました。



展　示　風　景

第４回　有田陶交会展

平成元年３月18日から３月26日まで、第４回有田陶交会展が開かれました。今年のテーマは「酒宴の器」です。３月19日にはテーブルセッティングについての講演会も行なわれました。

展　示　風　景

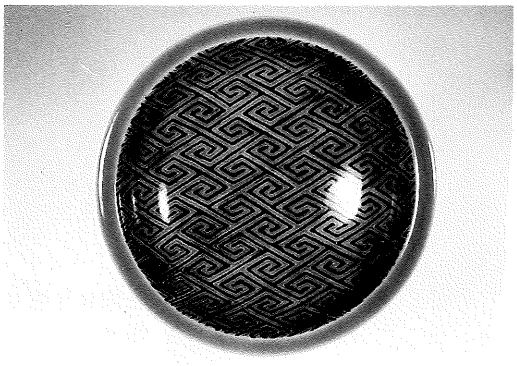
シリーズ

やきものにみる文様 (16)

雷文様

渦巻形が方形になった文様。複数個の方形渦形が一組になって文様を形成する。中国の伝統的な幾何文様として知られる。中国の東南沿岸地区で新石器時代から漢代ころまで盛行したという印文土器に雷文があらわされている。また殷周の青銅器にもみられ、宋の大観年中（1107－10）に撰された『博古圖』には地文として雷文が描かれた周代の青銅製の水を盛る器「周徧地雷紋匜」を紹介している。ギリシアでは「メアンダー」といって紀元前9世紀頃から幾何学様式の陶器に用いられている。名称は小アジアのトルコにある曲折のはなはだしいメンデレス川に由来するという。北野天満宮に蔵される『北野天満縁起』絵巻（「承久本」と称される。1219年の作と推定）の巻第五には雷神となって清涼殿で猛威をふるう菅原道真の怨霊と立ち向かう藤原時平が描かれている。稲光りの先端は後世にみるような明確な雷文とはなっていない。しかし廊下からころげ落ちようとする公卿のつけている裾（束帯の背面下方につけてひきずる部分）には雷文が描かれているのが注目される。江戸時代には「いなづま」とも呼ばれ、小袖雛形のひとつ『源氏ひいなかた』（貞享4年・1687刊）には「角いなづま」「菱いなづま」として雷文を紹介している。写真に紹介する作品は18世紀の作品。鐔状の口縁部には青磁釉を施し、内面には染付で藍地に薄瑠璃色の雷文をあらわす。雷文の縁は墨弾きによる白抜きの線でくまどりされている。

（吉永陽三）



染付青磁雷文皿　鍋島藩窯

18世紀　館蔵

シリーズ

やきものの技法 (16)

青磁

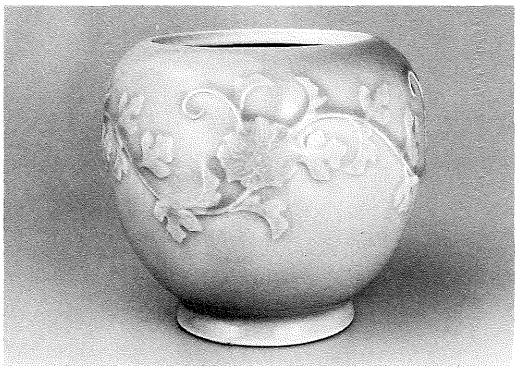
青緑色の釉薬が施された磁器のこと。青緑色は釉中にふくまれる鉄分を還元焼成することによって得られる。通常3％ぐらいの鉄分がふくまれている。これより少ないと青白磁となり、さらに少なければ白磁となる。また釉中の鉄分がふえると、鉄分を還元しきれなくなり、黄色から褐色、さらに黒色の釉薬となる。

青緑色または緑色の釉は、銅分をふくむ釉薬を酸化焼成することによっても得られる。しかし青磁釉のように透明性がなく、不透明で緑濁色である。またソーダ釉に銅分を入れると、トルコブルーのような低火度焼成用の青釉ができるが、これも青磁とはいわない。青く見えても、鉄分をふくむ釉薬を還元状態で本焼き（高火度焼成）したものでなければ、青磁ではない。

青磁は白磁の上に青緑色の釉を施されたものを基本とするが、胎が白色でなく灰色や褐色の場合も青磁と呼ばれることが多い。中国宋時代の青磁に、胎が褐色で釉が青白濁のものがある。我国で粉青磁とも呼ばれるが、これも青磁の1つである。青磁の色調はこのように釉の色ばかりでなく、素地の色で様々な色調を生み、また焼成の状態でも複雑に変化する。

写真の水指は、南宋時代の龍泉窯青磁にならった鍋島青磁である。押型成形による唐花や唐草を素地に貼りつけ、文様の凹凸を青磁釉により強調している。凸部は釉がうすいため白く見え、釉の溜っている部分は濃い青となる。

（鈴田由紀夫）



青磁唐花唐草陽刻文水指　鍋島藩窯

18世紀　館蔵

陶磁資料寄贈者芳名（敬称略）

〔昭和63年４月１日～平成元年３月25日〕

九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

またご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展（平成元年５月30日～６月11日）に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

前田雄一郎　佐賀県　銅版染付野球具文小皿

宮原律子　佐賀県　染錦楓流水文火鉢、染付楼閣山水文火鉢、染付流水文火鉢、染付唐草松文火鉢２点、染付牡丹文衛生陶器

13代今泉今右衛門　佐賀県　色鍋島薄墨珠樹文花瓶、色鍋島薄墨珠樹文花瓶、色鍋島吹墨薔薇文花瓶

山崎隆生　福岡県　黒釉耳付花瓶、染付唐草文皿、青磁茶筌形瓶、青磁色絵紫陽花文皿

笹倉一男　福岡県　染付山水人物文皿、灰釉猪口付鉢

河本正年　熊本県　染付鷺文皿

工藤吉郎　東京都　染付芙蓉手鳳凰文大皿、染付草花文皿

松尾次郎　佐賀県　ハニワ88－８－１

富樫次男　東京都　染付水仙文変形皿、染付唐花雪輪文皿、染付笠文変形皿

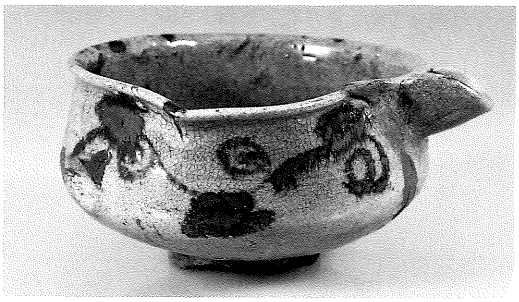
小橋一朗　埼玉県　白磁陽刻唐花文小皿、染付赤壁賦文向付、染付唐獅子牡丹文小皿

荒木和子　東京都　青磁彫花文鉢、白濁釉碗

江口　茂　神奈川県　飴釉白流掛三耳壷

杉野トシ子　佐賀県　色絵松葉文蓋付碗

竹田恒夫　佐賀県　染錦七宝文男人形、染錦菊花流水文女人形、染錦花車文人形、染付花鳥文大皿、染錦唐花松文深鉢、染錦山水龍文大皿、染付網目文大皿、染錦婦人図沈香壷、色絵松竹梅文長皿、青磁玉取獅子置物、染付紗綾形文陶硯、染付水仙文鉢、染付牡丹文鉢、白磁瑠璃龍貼付瓢形瓶、錆瑠璃菊蝶簪形熨斗押え、染付唐子人形、絵唐津草文片口、絵唐津若芽文反鉢、灰釉水指、白唐津茶碗、朝鮮唐津茶碗、朝鮮唐津皿、象嵌花文盃台、黒釉麦麺手茶碗、褐釉人磨人形、打刷毛目藤文角切皿、染付山水文平茶碗、藁灰釉壷



絵唐津草文片口　16世紀末～17世紀初

松浦古唐津・市ノ瀬高麗神窯　竹田氏寄贈

色鍋島薄墨珠樹文花瓶

13代
今泉今右衛門作

昭和59年（1984）

今泉氏寄贈

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館　年末年始（12月28日～１月４日）休館

観覧料　一般200円（150円）／大学・高校生150円（100円）／中・小学生70円（50円）／（ ）内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。

交　通　佐世保線有田駅下車徒歩15分